

まんたら通信

第208号 (通巻243号)

平成25年10月 西暦2013年 佛暦2579年 皇紀2673年

安房国八十八ヶ所 第一番札所
295-0103 千葉県南房総市白浜町滝口1084
真言宗智山派 天神山 紫雲寺 高栴 龍渉
郵便振替 00120-2-43163 紫雲寺
TEL0470-38-4740/FAX 0470-30-5040
<http://www.shiunji.org/>
Mail post@shiunji.org

お釈迦さま あれこれ

先月号の『余滴』にインド行きのことを書きました。予定通りなら、来月の今日六日あたりは、お釈迦さまがお涅槃に入られたクシナガルに着いている筈です。

いつもの旅ですと、何人かの同行者がいて、私が一番信頼している、東京の旅行社の社長さんが日本から付きつきりですから、飛行機に乗るのも着いてからの通関もなんの心配もなく、ただ予定通りに移動するだけです、その代わり「今日はこの木陰で本でも読みたい」とか「ここで夕陽を写したい」とかという我が侘が憚られます。

というわけで、今回は荷物もちと修行をかねて孫弟子一人だけ連れて行きたいと思っております。これなら万一体調を崩



しても、余り苦勞せずに予定の変更ができますし。

インドは、旅行案内に『混沌の大地』などがあるように、核爆弾を持ち電子産業で世界の先端を行っているのはご承知の通りです。そうかと思うと『不可触賤民』という、人間語を話すが扱いは動物という人たちが、田舎にも大都会にも沢山います。

写真は七年前の、クシナガルの郊外の風景ですが、二五〇〇年前と少しもかわっていないように見えます。托鉢に向うために、朝もやの向うからアーナンダ尊者をお連れになったお釈迦さまが、今にも現れそうな気持ちになります。

インドはまた、アジアのほかの国々と同じように、大の日本鼻の国でもありません。日露戦争で北の大国ロシアを、開国ま

もない日本が打ち負かした時、まるで自分が勝ったかのように毎日旗行列や提灯行列をしたと、東京裁判でただ一人『日本無罪』の判決をしたパール判事が言っています。

お釈迦さまは八十歳になった時、おそばに仕えるアーナンダ尊者に「私の身体は、古ぼけた車が、革ひもで修繕しながらやと動いているようなものなんだよ。」とおっしゃって、遊行の時はいつも滞在する、なじみ深いラージギル(王舎城)郊外の靈鷲山から、修行僧達と北を目指して出発されます。

行く先々では村外れのマンゴー園や林、お堂に泊まり、求めに応じて村人に法を説き、同行の修行僧には、苦とは何か、生まれ老い、やがて死ぬという苦しみから解脱するには何が大事かと、今まで繰り返して繰り返して話してきたことを丁寧にお説きになりました。パールヴァ村まで来た時、雨期になり、活発に動き

出した虫を不用意に殺さないための定住生活『雨安居』に入ります。

『雨安居』で思い出しましたが、ある年の雨安居の時、袈裟か何かの繕い物をしていて、老いた修行僧が針に糸を通せず、困っているのをご覧になったお釈迦さまが「どれどれ、私が通してあげよう。」と、後ろから声をおかけになりました。振り向いた修行僧は、お釈迦さまだったのでビックリし「そんな畏れ多いことを」といった時「私も功徳を積みたいのだよ」とお返事したという話があります。(当時、お坊さんの衣類は、使い古して道ばたに捨てられた布きれを継ぎ合わせて作りしました。一番分かりますのは袈裟ですが、一尋四方の一枚の布そのままの形です。現在では法衣やさんから買いますが、つなぎ合わせてあることに変わりはありません。これは当時の質素第一の心を忘れないためですね。)

このあと、旅を進めてパールヴァ村に着いた時、飾り職人チユンダが差し上げた食事をもとで、重い病気になるました。お釈迦さまはチユンダが心を痛めることを心配されて、おつぎのアーナンダ尊者に「チユンダに伝えよ。ブツダが悟りを開く時スジャータが捧げた最初の食事と、その最後の食事は、何れも較べるものない特別の功徳があるということ。」とお申しつけになったということです。

重い病を押してクシナガルに着いた時、「アーナンダよ、私は疲れた。」とおっしゃって二本のサーラの樹の間に、頭を北に、西を向いて横たわりました。急を聞いて駆けつけた多くのお弟子達が見守る中、最後まで教えを説き続けて夜半になった時「では弟子達よ。私の教えをよりどころに励むが良い。」とご遺言して、涅槃に入られました。二月十五日、満月の夜でした。そのお顔は遙か北の彼方、征服されて今はない、シヤカ族の国力ヒラバストウを向いていました。

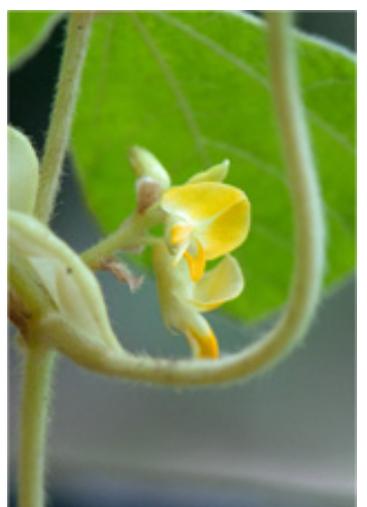
出た虫を不用意に殺さないための定住生活『雨安居』に入ります。ある年の雨安居の時、袈裟か何かの繕い物をしていて、老いた修行僧が針に糸を通せず、困っているのをご覧になったお釈迦さまが「どれどれ、私が通してあげよう。」と、後ろから声をおかけになりました。振り向いた修行僧は、お釈迦さまだったのでビックリし「そんな畏れ多いことを」といった時「私も功徳を積みたいのだよ」とお返事したという話があります。(当時、お坊さんの衣類は、使い古して道ばたに捨てられた布きれを継ぎ合わせて作りしました。一番分かりますのは袈裟ですが、一尋四方の一枚の布そのままの形です。現在では法衣やさんから買いますが、つなぎ合わせてあることに変わりはありません。これは当時の質素第一の心を忘れないためですね。)

余滴

▼遅れに遅れた今年のヒガンバナの開花。おととい辺りから満開になって、燃えるような赤と澄み切った青空に、秋到来の実感があります。この植物はタネができないとか。ですから、人間の手以外に広まるのが出来ませんから、人里近くにしかないことが納得できます。球根に毒があるので、そのままでは食用になりませんが、水で晒すと食べることが出来るのだそうですね。▼海への散骨、樹木葬などが話題になっています。家族の絆がおろそかになって、自分が

亡くなった後が心配ということですね。個人単位のお墓として、紫雲寺では『密厳塔』を造っており、既に多くの方をお祀りして、ご家族やお知り合いがお参りに来ています。また、以前からしていることですが、墓地はあるけれど遠くにお参りが大変、という方はご連絡下さい。お彼岸やご命日、お施餓鬼の塔婆などお寺が代わってお参りに行きます。当たり前ですが、「地域のためのお寺」の基本方針はずっと変わりません。▼今月の野草はタンキリマメ【マメ科タンキリマメ属】。つる性の

多年性で林の縁などに生えています。花の大きさはせいぜい5ミリほど。タネが痰を切る効果があるからということですが、本当かどうか分からないそうです。咲き終わると可愛らしいサヤができ、やがて秋が深まる頃、パチンとはじめて、つやつやと黒い宝石のようなタネが顔を出します。当然ながら小さ過ぎて、これまた撮影には苦勞するのですが、次回にはここに掲載したいと思っています。



2013/10/06 龍渉

にっぽん人情小噺

三遊亭鳳豊ほうほう

第九十三話 里親

エジプト、シリアなどアラブ諸国がいま政治的に混乱しています。

同じ民族同士で化学兵器などを使うなんて、本当に悲惨です。それに対し、アメリカがまた介入しようとしています。いつになったら、戦争のない時代がやってくるのでしょうか。

今日は、かつて中東で爆撃に遭ったひとりの少女の運命について考えていきたいと思ひます。

いまから三十年近く前、イラン・イラク戦争の真つ只中のことです。

イラン西部、イラク国境近くの小さな町にひとりの女の子が生まれました。中近東独特の黒い目の、鼻筋の通った、それはそれはかわいい子どもでした。

しかし、戦争はいつの時代も、そんなひとりの子の誕生を無視します。その子が三歳のとき、生まれ育った町をイラク軍が爆撃し、彼女の家は一撃で破壊されました。一家は、両親と兄弟十人のうち、その子がひとりだけ助かりました。助かったのは、爆撃から三日目、瓦礫の下から小さな手が出ていたのが救助に来た人たちによって発見されたからです。

最初は、人形の手が出ているのかと思つたそうです。でも、その手がかすかに動いた。

たまたま救護のボランティアで現地に来ていた女子大生のフローラは、その子の存在に気づき、他の仲間と力を合わせ、瓦礫の下から女の子を助け出したのです。幸い、軽い怪我だけで済んだので、その子は、家族が全員死亡したため、施設に入れられました。かわいそうに、わずか三歳で、戦争のために天涯孤独になってしまったのです。

その施設をフローラが訪れたのは、それから三年後のことでした。

（あの女の子、私のことを覚えてるかな？ 小さかったし、あの時しか逢っていないから、私のことなんか忘れてるだろう）

フローラは、そう思いながら、六歳になつたその子に会いました。

（わー、大きくなつたなあ…）

「あなたが瓦礫のなかから救い出した子ですよ」と言われ、膝を折り、彼女の目線と同じ高さになつた時、その子が目を輝かせ、「ママ（お母さん）！」と言つて、フローラの胸に飛び込んできたのです。施設の人たちも、驚きました。この子は、收容されて以来、ずっとふさががちで、そんな積極的なことはこれまでしなかつたからです。

フローラもびっくりしました。自分のことなど忘れていたのだらうと思つたら、その子は覚えてくれていただけでなく、母親だと思つてくれていた。フローラは感動しました。そして、胸にすがつて離れようとしないうちにこの子の里親にならうと決心したのです。

しかし、彼女はまだ大学生です。フローラは、家に戻つて、その話を自分の両親に相談しました。すると、家族は大反対。フローラの家は当時のイランではかなり身分の高い家でしたから、フローラを大学にも行かせているし、将来は、大富豪の御曹司と幸せな結婚をしてほしいのです。それなのに、貧しい家になつたら、結婚すらできないというのが、反対の理由でした。

もちろん、親としては当然の意見です。自分が仕送りを受けているような状況で、子育てなんかできるわけないからです。しかし、フローラは諦めません。どう

しても、その子の母親になりたかつたのです。事情を知つてか知らずか、その子もフローラを「ママ」と言つて、離れようとしません。そんなことが続いたある日、フローラは家族から最終的な選択を迫られました。

その子を施設に戻して、女子大生に戻るか。それとも…。

フローラは「それとも…」を選びました。「それとも…」とは、家族との縁を切り、その子の母親として生きるということでした。フローラは家族から勘当され、経済的援助を打ち切られてしまいました。

あと頼るのは、フローラのフィアンセでした。彼はたまたま日本に働いていました。フローラとその女の子は、こうして日本にやつてきたのです。その子もようやく日本の小学校に入ることができました。

ところが、フローラが実家から勘当され、経済的援助も受けられないことを知つたフィアンセは、二人を追い出します。二人は行くところもありません。言葉も満足にわからないフローラと小学生の女の子は、公園で寝泊りします。まさに、ホームレスです。その子は、学校に行けば給食がありますが、フローラにはありません。夜も食事なし。そんな様子に気づいたのが小学校の給食のおばさんでした。

なんだか、あるクラスの中の、給食をむさぼり食べるその子の異常さに気づき、彼女の境遇を知り、母親代わりのフローラを不偶に思つたのでしよう、パンの切り取つた耳をその子に持たせただけでなく、ベルシヤ絨毯の織り子という仕事を見つけてくれたのです。

さらに、給食のおばさんは校長先生ともかけあい、フローラとその子のための日本語の補習授業までやつてくれたそうです。

それでも、貧しさは変わりません。でも、その子のために、フローラは働いてお金が入ると白いブラウスやセーターを買つてあげたそうです。フローラは、洗つては着ている

白いシャツ一枚で寒い冬も過ごしたといひます。

こうして、なんとか大きくなつたその子は、その美貌からモデルになり、やがて、タレントとして活躍するようになりまひます。

サヘル・ローズ。隠し芸として、滝川クリステルの真似をしてニュースを読むことから、滝川クリサヘルとも呼ばれていまひます。時々、バラエティ番組で見かけたら、「ママ」と胸に飛び込んできた彼女のために、一生を賭けたフローラという心の美しいイラン女性がいたことを思い出してあげてください。そして、そのふたりの命を救つた給食のおばさんがこの日本にいたということも忘れないようにしたいと思ひつていまひます。

大東亜戦争の時、無理な作戦で沢山の犠牲を払つたと、評判の悪いインパール作戦があります。ビルマやシンガポールで、呼びかけに呼んで日本に投降したインド軍を再訓練し、インド独立の英雄スバス・チャンドラ・ボースが一万五千人のインド軍の指揮官になり、七万八千人の日本軍とともにイギリスの植民地インドに攻め込みました。

糧食、弾薬ともに途絶え、この作戦は失敗に終わり、日本兵の白骨を乗り越えて撤退するといひ、その悲惨な有り様から「白骨街道」の異名があるそうですが、インドでは「インド独立の作戦」として、今でも高い評価があるのだらうです。

この作戦がインド独立のきっかけになり、インドに攻め込んだ時の日本軍の規律正しさ、インド人への親切さが、今でも土地の人たちの記憶に鮮やかに残つていて、これを忘れてはならないと、慰霊碑を建て毎年慰霊祭をしていまひるのだらうです。

インド独立の功労者はガンジー、ネルとチャンドラボースといわれまひますが、何といひてもチャンドラボースが絶大だとか。若し、仏様が私を生かしてくれるなら、インド辺境のインパールに是非行きたいと思ひまひます。

きや」といひ、ひとの不幸を黙つて見過ごせず、あれこれ考える前に、とつさに身体が動いてしまふという行動が、沢山の人を感動させました。自身を振り返れば分かることですが、普段の小さなことでも、そうすれば良いことと分かりながら、実際にはなかなかできないことです。ご冥福をお祈りする次第です。

く、ご先祖も本尊様もお心掛けを、この上なく喜んでいることだらう。▼つい先頃、踏み切りに取り残されたお年寄りを救つて、亡くなられた娘さんがいまひました。若しこの先も生きておられれば、きっと世の中の為になつたらうと思ふとやり切れませんが、お父さんが止めるのを振り切つて「助けな

▼一昨日の夕方「永代供養のために収めて下さい」と150万円お持ちになつてお年寄りが見えまひました。生まれて初めて見た札束に腰を抜かしまひましたが、ご先祖を思ふ心とお寺への信用に、今までにない感動を覚えまひました。質素な暮らしをしながら100円200円を長い間貯めて、惜しげもなく手放すそのお気持ちは、誰でもできるものではありませんね。私だけ

余滴の続き